

神楽との出会い

尹光鳳

私の生まれた所はソウルである。生まれてまもなく悲劇の南北戦争が起こった。植民地時代が終わって、やっと独立して自立しようとするのに、イデオロギーのために同じ民族が戦う悲惨な戦争であった。これがいわゆる1950年に勃発した韓国6・25戦争である。戦争の終末は悲惨そのものだった。何も残さず貧困ばかりで、戦争は3年で終わった。当時食べ物がなくて、草根木皮で延命した記憶が今も鮮やかに目に浮かぶ。戦争中、乱を避けて住まいを移し、また帰ってきて暮らすようになった所が今の延世大学校がある新村である。今は大学の入り口に向かう大通りになったが、その時は小川だった。青い水が流れる所なので、村の名前も滄川洞だ。当時、この川辺に沿ってすすむ荘厳な行列がよく見られたが、それが喪輿であった。喪輿は遺体を載せ、墓地や火葬場まで運ぶ輿である。その葬儀行列がすごく面白くて、玩具さえなかった子供達には興味深い対象であった。私も好奇心を持って見た子供達の一人である。後に分かったが、滄川洞は火葬場が近い奉元寺の真下にあったから、行列が度々町内を通り過ぎていったのである。

また町内には巫堂が多くて、グッ(巫祭)が度々催されて町内がうるさかった。でもこれも面白いから良く訪れて見た。幼い頃から私はこのような風景に接しながら過ごした。これが縁になったのか、私は今では、このような民俗的な行事に関心を持って研究する民俗文化探究者になった。

このように幼い頃からグッをたくさん見ながら育った私にとって、日本へ来て見るようになった神楽は、あまりにも面白い対象だった。特に私の住む広島は片方に瀬戸内海があり、三面が山に取り囲まれたところなので、昔から鬼が度々現われるためか、伝統芸能である神楽が今に至るまで絶えず行われている。神楽のことを韓国語ではグッと言う。ところが、興味があっても関心を持って見れば見るほどはつきり分らないことが多い。現場へ行って繰り返し見ても分らないのは同じである。また文献と既存の研究論文を見ても曖昧なのは同じだ。その一方で、先学たちの論述は韓国と繋がれているし、

実際に現場で見てもそのような感じを消すことができない。ここではそれについて私なりの感想を述べたい。

日本の言葉に“今世の中は毎日のはれだ”という表現がある。それほど暮らし安い時代になったという話だ。韓国のように日本も終戦後には食べたくても食べることができないし、良い服を着たくても着ることができなかった貧しい時代があった。当時日本もとても貧乏だったから、特に庶民は口凌ぐのが忙しくて、腹いっぱい食べることができ新しい服を着られる節日が待ちどおしかったはずだ。これは韓国人が貧しかった時代に、新しい服を着てたくさん食べることができたお正月と秋夕を心待ちにした記憶を思い浮かべれば理解ができる。この日は周知のとおり先祖を祀る神聖な日だ。だから神聖に過ごすこのような節日が言わば日本のハレだと言える。“け”と対応する“はれ”という概念は日本民俗学の理解のための重要な単語だ。

経済が発達するにつれ、人々は節日しか食べられなかったものを何でも食べることができるようになったし、服も好きなだけ買って着ることができるようになった。したがって食べ物と服のための節日が別に必要ではなくなったのだ。言わば今日の節日は、日常の業務から脱してそれぞれ自分なりにストレスを解消するものになった。それで海外旅行ブームがおこるようになって、節日の風俗も変わるようになった。ところでこのような神聖な日々が日本の場合ほとんど神社と関係がある。これは日常的な生活(けの生活)の汚さを、この日を期してすべて洗い上げて新しい心で飾りつけることができるからだ。したがってこのような姿のために、今も日本の人々は斎戒沐浴をして神社で神聖な礼をあげている。

神社と係わる日本の神道は、このために家と共同体の生活を基盤に血縁的地縁的である神々を奉じて、神さまと人を受け継ぐ神人合一の観念をより内実化させている。それでこの日になれば不正なことが近付くことができないようにセキズルを編んで白い紙をつけ、神聖な地域であることを表示する。私たちふうに言うと注連縄だ。神道の聖域を表示する象徴は、磐座・磐境・神籬・神奈備・森だ。

神社と神祠

宗教的に見ると韓国のグッは巫教であり、日本の神楽は神道である。日本の神道に言及する時“八幡稲荷八万”という言葉がある。これは全国に八幡神と稲荷神のための神社がそれぞれ4万社あって、これをあわせると8万という意味だ。現在たえず行われている日本の祭りがまさにこの二つの神様を祭った八幡神社と稲荷神社を中心に行われていることは、韓国人の立場から見ると興味深い。何故ならばこの二つの神様はいわゆる渡来人という人々によって祭られた神様であり、韓国の祖先と繋がりがあるからだ。日韓両国の神社は皆このような祭りすなわち巫祭をおこなう神聖な場所である。日本の神社は韓国の神祠と同じである。漢字が違うだけで、発音もまったく同じである。神社は天照大神をまつり、神祠は檀君をまつる。

巫教と神道

グッというのは芸能面で見るとき呼ぶ俗称で宗教上では巫教に属する。日本の神楽でも芸能面で見ると俗称で宗教上では神道に属する。両者ともに神様を請じて巫祭に祭って、神様のために楽しい遊びを提供する。グッは檀君信仰から始まって多くの神様を祭るようになったもので、神楽というのは天照大神から出発して、これまた多くの神様を祭るようになったから、両者共に祭天儀式から始まったことが分かる。しかし巫教と神道の意味はまだ曖昧で、混乱をもたらしている。結局は巫教も神道、ともに未発達の宗教だというしかない。かつてアストン(W. G. Aston)は神道に対して次のように指摘した。日本の神道は最高神ないし偶像や道徳律が相対的に貧弱である。そして霊の概念を人格化することが弱くて来世の状態を実際に認識していないので未発達の宗教というしかない。(『The way of the god』)このような指摘は韓国の巫教も例外ではないと思う。ところで彼が見た神道に対する刮目に値する指摘は、神道の中に韓国の跡があるというものである。そういう例として韓の神(韓神)が天皇の宮殿で崇拝されているという事実がある。

日本の神社の中に白山神社が多くある。この神社は実は韓半島から渡って来た渡来人によって檀君をまつた神社であった。しかし今は祭る神々が皆変わった。

朝鮮のアメノヒボコのもとを去って難波に帰ったとされるアカルヒメを祀

る神社は姫許曾神社(ヒメコソ神社)である。また新羅神社、韓国神社、辛国神社、韓神社、百濟神社、高句麗神社、高麗神社、高来神社、白髭神社、白鬚神社なども渡来系の祖神を祀る神社である。そして八幡神社、出雲大社、稻荷神社、松尾神社、大貴己神社、諏訪神社なども朝鮮から渡来した氏族が祖先を祀る神社である。これを見ると日本の神社の嚆矢は朝鮮半島から渡来した氏族に始まるといっても過言ではないだろう。

新羅では王の即位儀礼に、始祖墓や神宮で祭事を行うことにした。すなわち祭事を通して、祖先神・天神から王権が付与された。『三国史記』によると、新羅の朴赤居世は始祖として廟に祀られた。西暦6年のことで、およそ五百年を経た西暦508年に、新羅神宮設置に対する記録が21代素智王9年(487)に現れる。また昭智王17年(495年)には王が直接神宮で祭事を行ったという記録がある。つまり、古代には韓国にも祖先を神として祀る「神宮」が存在した。

赫居世の「居世」とは神を意味しており、「コセ」、「コセ」、「コソ」、「キノ」はすべてこの範疇に含まれ、日本の「コセ」は御所(ゴセ)、巨瀬(コセ)、小瀬(コセ)、古瀬(コセ)、高僧洞(おそばら)、木曾(キノ)、伊太祁曾神社(イタキノ神社)などは、古代の神を祀る場所であったと考えられる。

上田正昭は渡来神の類型を次のように定義する。

一つ目、渡来人が日本神を信じる場合、二つ目、日本人が渡来系の神を信じる場合、三つ目、渡来系の神様を到来人集団が信じる場合がそれである。今の状況は二、三番目が主対象である。

グッと神楽の種類と祭次

祭神を基準にして韓国のグッは天神祭、始祖祭、山神祭、竜神祭、地神祭、城隍祭、堂山祭、都堂祭などに分類される。その他目的によって財数グッ(商売繁盛祈願)、憂患グッ(病氣治療祈願)、別神グッ(五穀豊穡祈願)、ソノリグッ(牛を祀る五穀豊穡祈願)以外多くの種類がある。神楽というのは大きく分けて御神楽と里神楽に分かれる。宮中の神楽を見神楽という、今日でもそのごく一部が宮中や小数の神社で執り行われている。また里神楽は民間

のもので、伊勢神楽、出雲神楽、巫女神楽、獅子神楽などに区分する。その祭次を見るとグツの場合おおむね12コリが中心なのに、神楽の場合は12コリ以上である。祭儀を行う神堂の祭壇にはさまざまな神の絵(巫神図)が飾られているが、神楽には神の名前が書かれた和紙がいろんな形で御殿を飾り付けている。

神懸かり

韓国の巫は神懸かりする降神巫と家代々に続く世襲巫に分けられる。神懸かりムダーンはその神通力を誇示、殺した豚の生き血を飲んだり、並行に置かれた短刀の刃の上に素足で立って踊ったり、口に剣を刺すなどの荒技を見せたりする。神楽でも神懸かりの場面があるがその雰囲気は差が大きい。

「神楽の源泉」を知るために桓武天皇と韓神そして園神を述べたい。

今も天皇家では韓神と園神を称える神楽が行われている。これは古代韓日関係を察するのに重要な話素である。このような儀礼は桓武天皇時代から公式的に始まった。『延喜式』の券第九すなわち「神名帳」(上)には「宮中神三十六座」の「中宮内省に座す神三座」として、「園神社韓神社二座」を記載する。平安京の宮内省に奉斎されていた園神社は宮内省の南に、韓神社は宮内省の北に鎮座していたが、この両神の祭りは、毎年二月の春日祭の後の丑日と毎年十一月の新祭の前日に厳かに執行された。ここで園神は新羅神、韓神は百濟神である。韓神は、もと秦氏らの渡来系氏族によって祭祀されていたその地域の守護神であった。この韓神は御神楽の中の不可欠の曲目となっていた。この時建てられた平野神社も百濟の聖王を奉った神社であった。

平野神社は京都市北区平野宮本町にある。百濟26代聖王に仕えたとして歴代王たちがこの神社を参拜した。祭神は4座である。第一殿に今木神(聖王)、第二殿に久度神(仇台王すなわち温祖)、第三殿に古開神((沸流王と肖古王)、第四殿に比売神を祭祀する。これについて内藤湖南の『近畿地方における神社1930』と上田正昭の『神道と東アジアの世界1996』が参考になる。

一方、桓武(781-806)の母親は和新笠(純陀太子(武寧王の王子)の直系子孫の和乙継(わのおとつぐ)の娘であるが、後日姓を高野に変える。ご主人

は49代の光仁（770-781、百済王族）である。光仁は38代の天智（661-671）王の内孫で、天智は百済が滅びた663年、九州で数多く救援軍を徴発して、百済の白村江に派兵した人物である。また桓武即位時代に朝廷では三国（新羅・百済・高句麗）と唐の音楽が雅楽に指定される。宮庭音楽の専攻者は三国人が主催した。554年に百済から来た最初の樂人は施徳三斤など4人だった。桓武王の時代はかなり大勢の百済人たちに和朝臣という武寧王の王族氏姓を付けた朝臣たちの官職を付与した。清水寺は応神王（混支押紙）の極楽往生を祈るために8世紀末建てられた寺である。この寺を建てた人物が坂上田村麻呂（758-811）である。この人は応神王の時、百済から渡って来た阿知使主が先祖だ。麻呂は桓武天皇時代に最高將軍として、アイヌ族を征伐した。石清水八幡宮は源氏家門が彼らの先祖神を祀る宗廟である。

『日本書紀』「天智2年9月7日条」に見れば、百済遠征軍の敗北に対して「百済の州柔城が陥落されたから、百済という名前は今日で終わった。これから先祖墓所に二度と尋ねることができなくなった」という遠征軍の嘆声が見える。このように神社と韓国の繋がりには、思ったより多い。

参考

『新撰姓氏録』：815年編纂。この刊行をその息子（万多親王788-830）に言い付けた人が桓武であった。「弘仁私記（9世紀纂）」によれば先住民たちとの葛藤を解消するために桓武が韓日同族関係書籍を燃やすようにしたという。

また彼は794年平安京遷都と同時に王宮の中南北に韓神（百済神）2神と園神（新羅神）のための祠堂を建立する。『延喜式（総 50冊927年完成）』の巻第九に記録されている。そして平野神社を造って百済聖王（523-554）を称えるようにした。

参考文献

- 喜田貞吉（1871-1939）『日鮮民族同源論』1924
金澤正三郎（1872-1939）『日鮮同祖論』汎東洋社 1929
江上波夫（1906-2002）『騎馬民族國家説』中公新書 1967
井上光貞（1917-1983）『日本國家の起源』岩波新書 1960

上田正昭(1927-) 『神道と東アジアの世界』 徳間書店 1996
内藤湖南(1866-1934) 『近畿地方における神社』 弘文堂 1930
金達寿(1919-1997) 『日本古代史と朝鮮』 講談社学術文庫 1985